

二番目狂言は

泉鏡花作

明治四十五年一月

山の手の作者、今以て生息子にして、實際廓を存じ申さず。村祭の夜木菟と成つて、覗機械の繪で見たい世界を、舞臺に掛けた丁山姿、見物の媛郎方は、百萬燈の光を透して、オペラグラスさへ差向け給へば、俳優たちも嘸演にくからん、思へば暮の年わすれ、借金取を鶯に聞かうばかりの酒機嫌、ちやらちやんちやらと浮かれの一節、ひとつ二次會、二番目狂言、さわぎの幕明合點だと、うか／＼乗りはしたものゝ、きまりの悪さ頬被、清が戀路を忍ぶにあらねど、可恐い、可恐いおゝ可恐い、評判記と渾名の、ある、色の黒い伯叔さんに、土手で逢つたら何とせう。正月場所と大目に見て、大門木戸口お通しあれ。初日二日の姫はじめから、ひく手あまたの松飾、大入叶春木町、それ／＼二丁が入りましたよ。皆さんお早く、い永當々々。